

怪異に嫌わる

豊島与志雄

青空文庫

坪井君は丹波の人である。その丹波の田舎に或る時、伯父の家を訪れたところ、年老いた伯父は、倉からいろいろな物を持出し、広い座敷に処狭きまで置き並べて、それに風を通していた。

——君は田舎の旧家にある土蔵を知っているだろうか。壁の厚み三尺以上もあり、鉄鋳をうちつけた重い檜の扉の錠前は、二重にも三重にもなり、二階造りで、一階には窓がなく、段の高い階段を上つてゆくと、二階の正面にただ一つ、二尺四方ぐらいの小窓があるきりだ。如何に暴風雨の時でも、その中にはいれば深閑として、まるで洞窟にでもはいったよう。家人もめつたにはいらず、掃除なども殆どされず、埃の積るままになっている。そして其処には、実にさまざまな物が雑然とぶちこまれている。壊れかかった家具や道具の類が堆積していたり、紋章づきの櫃や長持が並んでいたりする。鼠にとっては禁断の場所だが、往々、大蛇が住んでいることもある。この土蔵から、所謂大切なものを取出す権利は、多くは年老いてる家長の専有するところで、随つて家長は、隔年ぐらいに一回、ふと思ひ出したように、伝承の古物を母家の座敷に持出して、土用干しをするのだ。

坪井君は、座敷に並んでいろいろな物を、好奇の眼で見やった。その中には、幾本もの刀剣類があった。それにちよつと心惹かれて、一つ一つ引抜いては眺めているうち、奇体にこちらの気を打ってくる一振がある。だいぶ錆がきてはいるが、あやしく肌身に迫る気配がする。坪井君はそれが欲しくなつて、伯父にねだつた。だが、それはやめたがよろう、と伯父は云う。幾本もあることだから、欲しければどれでも持つていつて宜しいが、その刀だけはやめたがよろう、と云つて承知しない。そうなれば、猶更欲しくなるのが人情で、坪井君は遂に二日ばかりで伯父を口説き、とにかく暫く貸して貰うということにして、ぬけぬけと分捕つてしまった。その時、伯父がさりげなく洩した言葉によれば、その刀はどういうわけか、昔からなるべく佩用しないようにとの言い伝えがあるのだとか。だが、そのようなこと、坪井君は別に気にも止めなかつた。

——田舎の旧家には、いろいろ曰く付きの物があり、またいろいろの言い伝えがあるものだ。それらのものが積つて、家の格式とか伝統とかを形造ることが多い。然しそれらのものも、いつしか忘れられがちになつたり、心にもとまらないほど遠い昔のことになつたりする。殊に近代の空氣に多少ともふれた、そして大まかな人は、それらの曰く付きとか言い伝えとかを、表面ではわざと輕蔑した風を装い、内心では倦き倦

きしているのだ。ところが、それらの無視された昔の息吹きが、時あって、勢強く立上ることがないものだろうか。立上つて復讐することがないものだろうか。あるとすれば、それが特殊な事件や一家の盛衰興廃などにからまると、風味ある小説になるだろうよ。

坪井君は当時、田舎の小さな町に暮していた。然るに、真夜中、丑三つの頃というのであろうか、顔色を変え息をつめて、がぼとはね起きた。薄紗をかぶせた電灯の朧ろな明るみのなかで、茫然と見開いた眼には、明瞭な幻がまだ映っている。すらりとした白衣の女人が、血の氣のない真白な顔をして、室の前の廊下を、滑るように、行きつ戻りつしている。その姿が、障子越しに、はつきりと見える。じつと眼をつけていると、それが障子を越し、すーっと迫ってきて、とたんに、眼が眩んだのだった。我に返りはね起きて、その幻が眼底から消えると、冷い戦慄が背筋に流れた。

それに類した幻を、坪井君は、三晩続けて見た。第二夜には、白衣の女人は室の外を、壁や障子の外を、ぐるぐる歩き廻っていたが、やがてそれが室の中となり、圈が次第に縮小して、坪井君の身体とすれすれになり、そこで坪井君ははね起きた。第三夜には、白衣の女人は、天井の上にいたが、やがて天井の下に出て来、坪井君の胸の上までおりて来、

そこで坪井君ははね起きた。

——坪井が見た妖性には、一つの特質がある。それは直ちに室内に出現しはしない。いつも、障子の外、壁の外、天井の上、などに出て来るのだ。而もはつきりと見えるのだ。その時、障子や壁や天井板は、そこだけ硝子のように透明になる。いや、それはむしろ硝子の面の映像とでも云おうか。障子や壁や天井の外だと見ていたのが、いつしかその内側、即ち室内になり、次ですぐ身边に迫ってくるのである。——硝子戸などに映った像が、硝子戸の外から室内へと移り迫ってくるのを、君は見たことはないだろうか。とにかく、坪井の妖性は特徴的だ。

坪井君は三夜続けて幻を見て、はたと思い当った。それは丁度、伯父のところから刀を貰って来たその夜からのことである。刀は床の間に置いてある。

幻が果してその刀の故かどうか、坪井君は友人に試してみた。小学教員をしている一人の友人を呼び、ビールなど振舞いながら引止めて、その夜、無理に泊めてしまった。隣室に寝かし、室の片隅に刀をひそかに置き、素知らぬ顔をしていた。その深夜、友人は慌しく坪井君の室に飛びこんで来、真蒼な顔をして喘いでいる。訳を聞けば、人間大の真白な蜘蛛が天井からおりてきて、やがて胸の上にのしかかり、息がつまったのだと云う。その

蜘蛛の幻が、眼底から去らず、怪しく心おののいて、一人では寝られぬと云う。

——坪井に現われたのは白衣の女人であり、友人に現われたのは真白い蜘蛛であった。この相違は注意に価する。僕の解釈は云うまい。君自身で考えてみ給え。

友人に試したことで、坪井君はいよいよ、幻はその刀の故だと確信を得た。其後、刀を行李に納め、押入にしまえば、幻は見ず、刀を取出して床の間に置けば、幻を見るので、ますますその確信は裏付けられた。

坪井君は無気味に思いながらも、その刀を伯父に返すのを惜しがった。そして或る研師の手にかけたところ、刀は無銘ながら、確かに青江の相当のものだとのことであつた。青江の刀と云えば、福岡貢の十人切の青江下坂をはじめ、妖刀として定評がある。坪井君はなお気味悪くなり、布に包み箱に納めて納戸に隠してしまった。

——こういう話、君は一笑に付してしまうだろう。僕だって、まさか……と思うことに変りはない。けれども、坪井を単に迷信家だと云いきるのも、どうであらうか。人は時あつて、或る思想に捕えられることがあり、或る観念に捕えられることがあり、随つてまた、或る幻覺に捕えられることもあるだろう。思想や観念が、往々にして人から独立して存在するものであり、それが人を捕えるのだ、という見方も成立すると

するならば、幻覚についても同じことが云えないだろうか。或はまた、前に云ったように、昔からの言い伝えなどというものが蘇って、坪井に復讐したのかも知れないのだ。

坪井君が東京に出て来た時、私は右の話を聞いた。私は心動いて、その青江の刀を是非見せて貰いたいと懇望した。坪井君は承知して、但し譲渡するわけにはゆかないと断り、郷里から刀を取寄せることにした。

坪井君が青江の刀を私の宅へ届けたのは、折も折、盂蘭盆の十三日の、しとしとと細雨の降る夕方だった。私は快心の笑みを洩らしながら、その刀をうち臨めた。縞目も分らぬ古錦の袋を開けば、年月の埃に黝んだ白鞘で、それでも研師にかけただけあって、中身は冷徹に冴え渡った大刀、相当の業物らしい。私は何事を措いても、その夜を楽しみに、少々酒まですごし、白鞘の刀を枕頭に横たえて、早くから床に就いた。

——僕の下心では、もしそれが本当にお化を出してくれる刀だったら、坪井が伯父さんを瞞着したように、何とかかとか云い張り、場合によっては如何に高価でも、借金までしても、それを坪井から巻き上げるか買取るかするつもりだった。刀には執着はないが、お化にこがれていたのだ。と云って、僕は妖怪変化の存在を信じてるのでは

ない。そんなものはまあ居ないものと思つてはいるが、然し、どうかして逢いたいのだ。世には、怪異を見たという人は随分多い。それがたとい幻覚であるにせよ、一生に一度ぐらゐは僕も見たい。怪異を見ることによつて、心情が深まりはしないだろうか、少くとも心情の風景が賑かになりはしないだろうか。僕は生来怪異が好きなのだ。深々たる真夜中、私はふと眼がさめた、と思つたのは誤りで、欄間には明るい光がさしている。起き上つてみるともう十一時になりかけていた。枕頭には青江の刀が昨夜のままで、そして一晩中何のことも起らなかった。

私はなお幾夜か、その刀をためしてみた。然し変化の出現する気配だにない。私は当外れの気持で、その気持のやり場に困つて、此度は子供たちに試してみた。

——お化にまで嫌われたかという思いは、へんに遣瀨ないものだ。坪井に出て、僕に出ないわけはあるまい。電灯も消して真暗な中に夜中起きていてやろう。と努めてみたが、眼覚むればすぐ起上る代りに寝ればすぐ眠るのが癖で、早くから寝たためにその数日、充分すぎるほどの睡眠が取れた。怪談も何かの役には立つものだ。本当にお化が居てくれたらいろいろの役に立とう。少くとも子供たちにはお伽噺の代りになろう。子供にちにとつて、近代では、もう妖精や怪物は死に失せてしまったし、魔法使

は姿を消してしまったし、王子様やお姫様なども居なくなってしまったし、奇妙な花や虫の美しさも消えてしまったし、つまりお伽噺がなくなったのだ。だからここに、青江の妖刀のお蔭でお化が復活するとしたならば、どんなに素晴らしい効果を来すことだろうか。

私の家には十歳から十五歳までの子供たちが三人いた。私は彼等が寝静まった頃を見はからい、その寝室にひそかに忍びこみ、彼等が枕を並べて眠ってる頭の方、床の間に、青江の刀を置いてきた。そして翌朝、昨晩なにか夢をみなかったかと尋ねてみたが、三人ともけろりとして、眼瞼に夢の気配さえない。

私は彼等の前へ刀を持ってきて、刀にまつわる怪談を話してやった。その話に三人とも熱心に耳を傾け、遂には自ら進んで試してみると云い出した。為すままに任しておいたが、彼等は怪異を見るところか、夢一つみなかった。

——幻覚は子供たちをも捕えなかったのだ。彼等は怪談の暗示にもかからなかったのだ。この経験は、子供の精神の健全さと明朗さを僕に信ぜさせた。子供の精神に対するこの信頼を、僕は持ち続けてゆきたいと思う。この信頼は、やがて次の時代に対する信頼になるのだ。それにしても、怪異を知らない精神は淋しい。怪異はあらゆる

夢想のうちの最も具象的な且つ最も飛躍的なものである。君はそういうものを知りたいと願うであろうか。然しもう、それは求めても得られないであろう。自分の精神力で創造し給え。

怪異を出さないとすれば、青江の刀は私には不用である。私はそれを坪井君に返した。その時、私も、坪井君もへんに相済まぬような微笑を浮べた。

——この話、全くの事実なのである。作為はない。其後幾年か、僕は坪井に逢わないし、消息にも接しないが、彼の何となく不健康な弱々しい姿、それでもどこことなく根が強そうな姿は、今でも僕の眼に残っている。どうしていることであろうか。君がもし坪井に逢うようなことがあったら、僕に代って宜しく言ってくれ給え。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄著作集 第六卷（随筆・評論・他）」未来社

1967（昭和42）年11月10日第1刷発行

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2006年4月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

怪異に嫌わる

豊島与志雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>